



▲江古田植物化石層の年代測定は約2万3千年前とされており、その近隣では針葉樹林が広がっていたと言う  
(カナダ・スタンレーパークにて2012年撮影)

# 樹木が語る中野の記憶

## ～江古田・桃園を今に伝える～

### 植物たちが伝えた日本の氷河期

「私は、近くの森の中に、アナグマの巣があるという噂を聞いたので、それを見たいと思い、野道を歩いていった。」(『学問への情熱 明石原人発見者の歩んだ道』より)

1936(昭和11)年、二・二六事件前後に現在の江古田図書館近隣では大きな水道管の敷設工事が行われていた。その時、たまたまアナグマを探していた考古学者であり、古生物学者であった直良信夫博士が、その現場を通りかかったことで、日本の考古学を大きく躍進させた。工事で掘り返された土の中には、現在の気候ではまず見つかからない植物、カラマツ・トウヒ・チョウセンゴヨウといったマツ科針葉樹の松かさ、松ぼっくりの植物遺体と呼ばれる化石が眠っていたのだ。

当時、様々な仕事を抱えていた直良博士は、化石の重要性は理解しつつも出土した化石を二十数箱分のりんご箱に詰めて、調査や研究を知己の古生物学者であった三木茂博士に託した。この時の化石と江古田植物化石層の発見は、まだ若い学問であった日本考古学を、縄文・弥生時代の1万年前より古い、氷河期まで視野を広げさせる契機となった。

土の層や植物の化石は、私たちに日本の氷河期がどのような景観だったのかを伝えた。江古田植物化石層から発掘された植物たちは現在ならば北海道やシベリアなどを中心に、本州であれば山岳地帯で分布する樹木であったため、1万以上年前の中野の姿は奥日光の戦場ヶ原や富士山4合目あたりの景観だったと推定されている。

江古田植物化石層は、氷河期の日本だけではなく、中世近世の中野区、武蔵野の姿を伝えており、多くの考古学者を魅了する化石層となった。とはいえ、化石だけでは伝えきれないものもある。江戸時代以前の江古田は、一面のすすき野と葦の原であったと化石層から知る事ができる。一方で、その中には道に沿って広がる椎並木が存在し、その名残となる大木が現在も残り、その当時を伝えている。





▲桃園川緑道より。緑道での植樹は当初危ぶまれていたが、近隣地域の協力によって実現した（2016年4月撮影）



▲中野区立歴史民俗資料館にある樹齢500年以上のツブラジイ。  
▲江戸・明治時代、ここから東の道に椎の並木があり、その根元は格好の休憩場所だったと伝わっている。（2016年3月撮影）

## 動乱の時代を超えた木々たち

中野区立第七中学校と山崎記念中野区立歴史民俗資料館の間には新青梅街道の基となった小石川道、あるいは石神井街道と呼ばれる江戸道が通っており、そこには椎並木が存在していた。この近隣は1477（文明9）年4月13日、「江古田原・沼袋の戦い」が行われた場所でもある。江戸城主太田道灌と現在の石神井近隣を治めていた豊嶋泰経・泰明兄弟が、この近辺から野方六丁目あたりまでを主戦場とした。特に、合戦における白兵戦はこの辺りが中心地であったと推定されている。

太田道灌は北条早雲とともに室町から戦国時代への過渡期に活躍した武将として知られている。早雲は下剋上で名を馳せ、実力主義の時代を築き、一方の道灌は戦いのスタイルを武士の一騎打ちから足軽による集団戦法に変え、500年もの歴史を持つ「江戸城」を築城した人物としても知られている。また道灌は、中野区の神社を頻繁に訪れたという伝承も多く、上高田氷川神社では長祿年間（1457―1460年）に訪れ、その際に松を植栽したと伝承が残っている。この松は、幹回り4メートルにも及ぶ御神木となったが、1937（昭和12）年に枯れてしまった。

「江古田原・沼袋の戦い」が行われた当時の関東は、山内上杉家を中心に治められていた。これに1475（文明7）年、長尾景春が下剋上を狙った乱を起こし、豊嶋氏を始め様々な勢力が味方した。対し、扇谷上杉家の筆頭重臣である道灌は勢力拡大の好機とし、乱の平定に向けて動いた。「江古田原・沼袋の戦い」は、主要な敵勢力



▲1942（昭和17）年に撮影された沼袋氷川神社の道灌杉

の豊嶋氏を滅ぼしたことで、道灌の優位が決定的となる戦いであった。結果、扇谷上杉家は山内上杉家と入れ替わりで戦国大名へ、長尾景春は下剋上を失敗することとなった。

戦いの勝者となった太田道灌は、中野区の様々な神社で戦勝祈願をしたとも伝えられている。その際に東中野本郷、沼袋の氷川神社では杉を献植した伝承が残っている。どの氷川神社も道灌杉と呼ばれていたが、残念ながら現存しているものはない。その中で沼袋氷川神社では、神社内に陣を敷き、軍神祭を行った際に杉が植樹され、1942（昭和17）年までの465年の間に高さ30メートルほどの大木となっていた。現在では道灌杉跡として整備され、道灌ゆかりの地として様々な人々が訪れている。

## 今を築く桃園の歴史

八代将軍徳川吉宗は、今の中野駅南口一帯に桃の木を植えるよう奨励し、当時絶景と呼ばれたほどの桃園を中野の地に作った。その景観は1834―1836（天保5―7）年に発行された『江戸名所図会』の「中野村桃園春興」にも、類を見ない貴重な桃花の花見名所として紹介された。しかし、その発行当時には既に桃の木の相当数が減り、明治にはわずかな木しか残っていなかった。だが、現在の中野区では中野駅南口や桃園川緑道など、至るところで桃の木を目にすることができる。

1997（平成9）年、日本の桃の木が、桃園地域の公共施設や呼びかけに応じた一般家庭の庭、あるいは桃にちなんだ各所に植樹された。この呼びかけ人は当時、住区協議会の桃園まちづくり小委員会から発足した「中野の桃園に桃の花をいっぱい咲かせる会（通称「桃の仲間」）」である。「桃の仲間」は、桃園地域のまちおこしと活性化を目的に吉宗の桃園を倣い、「桃園ルネッサンス」として桃の花を通じた景観改善をし、心が和む落ち着いた雰囲気のみちづくりを目指して発足した。東京都第三建設事務所を始め、中野区、地元企業、そして桃園地域の中野1〜4丁目、中央3〜5丁目で会員となつてご賛同していただけた方々の協力を得ながら、活動の第一歩として、南口のロータリーで植樹祭を行った。また、「桃の仲間」は、桃の花を通じた緑化活動だけでなく、中野通りを中心に清掃活動も行い、東京都と活動を行っている団体として「東京ふれあいロード・プログラム」に認定されている。こうして桃園地域・中野通りを中心に活動を続け、今年20年目となり、植樹本数は千二百本以上に達した。吉宗が作った桃園のように大々的に花見ができる場所はないが、ふと散歩したら桃の花に出会える、現代の町にあった新しい桃園が、中野駅南口を起点として私たちの身近に広がり続けている。

※東京ふれあいロード・プログラム

住民や企業と東京都が協同で道路の美化活動を行い、道路利用のモラル向上や、より良い道路空間の維持を図るための制度。

※住区協議会

中野区の15地域に設置された、推薦や公募により集まった構成員が地域の課題解決を考えるための協議会。

### ～参考文献～

『常設展示図録 武蔵野における中野の風土と人々の暮らし』中野区教育委員会／編、中野区立歴史民俗資料館／編 1989 所蔵：中央、南台、江古田  
『学問への情熱 明石原人発見者の歩んだ道』直良信夫／著 1995 所蔵：中央(禁)  
『東京の自然史』貝塚爽平／著 2011 所蔵 中央  
『決戦 豊島一族と太田道灌の戦い』葛城明彦／著 2010 所蔵：中央(禁)

『古老の語る沼袋・江古田の歴史2』中野区沼袋地域センター／編 1990 所蔵：中央、本町、野方、鷺宮、東中野、江古田、上高田  
『伝説と史実のはざま 郷土学と考古学』比田井克仁／著 2006 所蔵：中央(禁)  
『江戸名所図会 3 新訂』原田幹／校訂 1967 所蔵：中央  
～記事作成協力～  
中野の桃園に桃の花をいっぱい咲かせる会（通称「桃の仲間」）会長 日誌様